

[資料紹介]

小編集クラス対話のために

青山則雄

- 〈目次〉 まえがき
1 構成
2 対話の資料
あとがき

まえがき

本学専任講師に就任した1978年度以来22年間、著者はプロゼミナール、演習授業の指導にあたってきた。これらは、本学教育理念に記されている「徹底した少人数教育」であり、教員と学生の対話、双方向のコミュニケーションによる授業である。この方針に沿い、著者は対話のテーマとなる多くの教材を開発・作成し、これらを材料にディスカッションを中心とする授業を行ってきた。1,000字程度のもの、200編近くにのぼる。

それらを読み返してみると、内容的に不満なものもあるが、くり返し読み、考える手がかりになるようなものも相当数ある。それらをそのまま捨て去ってしまうのは惜しい、資料として役立てたいと考えた。それが本稿を人間・自然論叢に掲載をお願いした理由である。

1 構成

前記、百数十編のうちから、49編を選び、ときを経て内容が不適切となったものは、2000年3月本稿執筆時点において適正となるように修正した。

これらを次の5つの項目に分類し、共通するような内容のものをそろえた。

- A 人 (People)
- B 仕事 (Work)
- C 経験から (From Experience)
- D たのしみ・夢想 (Hobby; Daydream)
- E 思索 (Thought)

分類、見出しの選択について少し説明する。

まず、『人』であるが、わたしが演習を指導してきて、感じたことがある。

それは、履修生に一貫して「何かテーマを自分で選んで、調べて発表しなさい」という課題を出してきたのであるが、「人」をテーマにしたものがきわめて少ない、ということである。

わたしが、「もっと『人』に興味をもちなさい」というと、「わたしには尊敬する人はいません」などという答えが返ってくる。たぶん、学校の面接やテストで「尊敬する人は？」と質問を受けることが多かったので、「人」というと条件反射的にそう連想してしまうのだろう。

そこで、わたしは「尊敬する、エライ人にかぎりませんよ、とにかく世の中、社会を動かしているのは人なんだから、悪人でもいいんですよ。キライでも、イヤでも、関心をもたざるを得ない人について少し調べてごらんください」と指導してきた。ヒットラー、スターリン、アル・カポネなどはこの部類に入るだろう。固定観念を捨てなさい、もっと柔軟に考えなさいということだ。わたしは、例としてマイヤー・ランスキー*の話をしてあげたこともある。

* Myer Lansky (1902-1983). 革命前のキューバの賭博市場を牛耳っていた。映画『ハバナ』や『バグジー』に登場している。驚くことに、*Encyclopedia Britannica* (1986 ed.) は、何とこの組織犯罪の大ボスに、レーガン第40代アメリカ大統領よりもずっと大きい紙幅を割いているのである。

そして、こういう男たちのことから、第二次世界大戦がどうして起こったのか、1920年代の禁酒法がアメリカ社会にどんな影響をもたらしたのか、さらに法律というものは必要にはちがいないが（法治国家である以上）、悪法といわざるを得ないものもたくさんあるではないか、というディスカッションへつながっていくのである。演習やゼミの対話の材料として好適ではないだろうか。

『仕事』であるが、本当は英語のworkがいちばんピッタリだと思う。辞書にたくさんの訳語がのっているが、仕事に加えて、働き、課業、勉強、研究などがある。これらを総合的に含む「ワーク」といいたい。

『経験から』は、わたしが商社勤務、とくに海外駐在をしたときの体験で学んだことが中心である。

『たのしみ・夢想』は、遊び、趣味、リクリエーション、嗜好、そして創作2編を含めた。

『思索』と気取ったタイトルにしてしまったが、ふつうは『随想』であろう。しかし、この言葉には新鮮さがなく、古ぶるしい。「思いつくまま」というニュアンスも気に入らない。わたしは、常識とされる決まり文句、表現に疑問をもつことが思考力を強めると信じて疑わない。気恥かしいけれど『思索』とした理由である。カッコ内の“Thought”は、*Roget's International Thesaurus*, 5th ed., (Harper Collins, 1992) の定義, “Exercise of the intellect” がとても気に入ったからである。

全編に共通することが一つある。それは、いろいろな文献・資料から見つけた種(たね)が元になっているものもあるが、そのままの引用ではない。すべて、わたしのオリジナルな見方、考え方をつけ加えるように努力した。そうすることのできたものだけを採録している。

2 対話の資料

目次

A 人 (People)	113 ページ
1 本田宗一郎と時代精神	
2 長谷川萬治の哲学	
3 吉田健一と『金沢・酒宴』	
4 竹鶴政孝とリタ	
5 永井荷風の日記	
6 バーンスタインと感謝	

B 仕事 (Work) ……………118ページ

- 1 よいコミュニケーション——客も愛想
- 2 質問が授業の値打ち
- 3 手紙を書こう
- 4 わずかな才能でも
- 5 ミステリーを原書で読む
- 6 プロの教員
- 7 小さな約束を守る
- 8 わかりやすく
- 9 王様とかしこい消費者
- 10 寺田寅彦の『蓄音機』
- 11 新商人論について

C 経験から (From Experience) ……………129ページ

- 1 セント・キルダのポリス
- 2 ダイヤモンドでもすり減る
- 3 1988年アメリカの印象
- 4 席のゆずりかた
- 5 ユダヤ人から学ぶこと
- 6 アウシュヴィッツを訪れて
- 7 無理をしても
- 8 順番をゆずろう

D たのしみ・夢想 (Hobby; Daydream) ……………137ページ

- 1 発見するよろこび——その1
- 2 発見するよろこび——その2
- 3 レコードと生演奏
- 4 マティーニなくしては

- 5 ポーカー・スクエア
- 6 ラバウル風ステーキ
- 7 キャプテンの夜明け
- 8 あるお店で

Ⅱ 思索 (Thought)146ページ

- 1 人生に離別なかりせば
- 2 『海からの贈物』について
- 3 時 (とき) について
- 4 弘法筆を選ばずと道具
- 5 「つき」の重要性
- 6 法は美しい乙女
- 7 「ハンパ」はいけないのか
- 8 改札口の待ち合わせ
- 9 ミ・リヴェドライ, ティ・リヴェドロ
- 10 ジャングルと動物園
- 11 自慢したいことについて
- 12 覚悟がすべてだ
- 13 ダシール・ハメットのこと
- 14 大海を回遊するイワシになる
- 15 ネーミングの重要性
- 16 チャンドラーの名文句

A 人 (People)

1 本田宗一郎と時代精神

わたしの尊敬措くあたわざる本田宗一郎氏は、1991年8月に亡くなった。同氏自身の著書や評伝がいまでも書店の棚にならんでいるが、わたしは、自分なりに彼について述べることがあると考え、本学の総合科学研究所紀要(第9巻, 第1号, 1993.9)に一文を寄せた。これは、その要点である。

本田は革新的技術開発にすぐれ、F-1レースでたびたびチャンピオンに輝き、通産省の既存メーカー保護政策に挑戦して二輪車メーカーから四輪車メーカーに脱皮することに成功した。これらは広く知られていることであるから、あらためてここに記すまでもない。

わたしがいいたいポイントは、彼のようなユニークな人物の出現は、戦後日本の時代精神なくしてはあり得なかった、という一点だけである。

彼は単なる企業経営者ではなく、ユニークな本田哲学の伝道者であった。彼の生きかたを表すもっともふさわしい言葉は「ドリーム」である。いつも夢をもち、夢に向かって挑戦し、まわりにいる若者に夢を吹き込むことのできる教祖であった。

なぜ、そのような人物が登場したのか？ わたしは、戦後日本の一時期、1945年から1965年までの20年間は、日本の歴史始まって以来、もっともオープンかつ自由な時代であったと思う。生活は苦しく、物質的には恵まれない時代であった。しかし、将来への確信をもつことのできる輝かしさに満ちていた。その原動力は「自由」である。この希望にあふれる時代のエートス(時代精神)をもっともすばらしい形で体現したのが本田宗一郎である。

終戦直後の日本は、ペリーの黒船によって開かれた幕末、その後の明治維新を連想させることが多い。本田は、1954年に、イギリス、マン島のオートバイ・レースを見に行き、目を見張り、半ば悲観したが、外人にやれるの

に日本人ができないはずはない、と発奮して後年全種目を完全制覇した。

本田は、そのようなまれな時代に生き、その精神をもっともすばらしいかたちで表現することのできた幸せな人物だったのである。

2 長谷川萬治の哲学

長谷川萬治（自称、長谷萬）さんは、東京深川の木場の材木商で、昭和49年から3年間、長者番付日本一になり木場最後の大旦那といわれた人である。同業を営んでいたわたしの父が亡くなったとき、葬儀委員長をやってくださった。

長谷萬さんが書いた『木之路』（日刊木材新聞社、1967年）という本を読むと、彼は大商人であったばかりではない、まれな教養人であったことがわかる。それは文章に表れている人がら、謙虚さ、見識からも明らかである。歌舞伎の通のなかの通であり、不世出の名優といわれた六代目・尾上菊五郎と親交があった。六代目が「長谷川君、きみのような芝居を味わってくれる人が三十人か五十人いてくれると本当にうれしい。役者の本音は下手な素人うけをするよりも、芸のこまかさや、苦心のしどころをみてほしいのです」といったそうだ。世間によくいる低俗な役者びいきとは鋭い一線を画していた。

「私の人生観は、ひとの二倍はたらいて、趣味、道楽を120%やって、人生を三倍にして生き抜きたい。ちょっと大げさな言い方ですが人生三倍論です」、また「私は人生とは未完成であるのがのぞましいと思います。未完成であれば（こそ）そこに希望と努力と生き甲斐があると信じます。」

これが彼の哲学だった。うらやましい。こういう哲学をもって生きたいものだ。

長谷萬さんは、昭和51年12月6日、羨望する85歳の生涯を閉じた。

3 吉田健一と『金沢・酒宴』

吉田健一（1913-1981）は英文学者であるが、多彩な文芸作品も残している。そのなかにはじつに味わいの深いものがある。

表題の本は、そのような作品二つを講談社文庫がまとめて出版したもので、わたしの措くあたわざる愛読書になっている。このうち、『金沢』のほうは別稿『キャプテンの夜明け』を執筆する強い刺激を受けた作品である。

彼は無類の酒飲みであつたらしい。『酒宴』は、酒飲みの気持ちというものを表現した最高の文章のように思える。引用したい文はたくさんあるが、ひとつだけ、ここに紹介したい。

「酒飲みというのはいつまでも酒が飲んでいたいものなので、終電の時間だから止めるとか、原稿を書かなければならないから止めるなどというのは決して本心ではない。理想は、朝から飲み始めて翌朝まで飲みつづけることなのだ、というのは常識で、自分の生活の営みを含めた世界の動きはその間どうなるかと心配するものがあるならば、世界の動きだの生活の営みはその間止まっていればいいのである。」（前掲書、p.196）

酒を飲まない人は、おそらくこの文章から「不可解、何と馬鹿な、」という印象を受けるにちがいない。しかし、わたしにはじつによく理解できるのである。

一言つけ加えたい。飲むことじたいではない。彼の文章から伝わってくる「生き方」ということについて語るために、最上のヒントの一つであると思う。それが本文の目的である。

4 竹鶴政孝とリタ

竹鶴政孝さん（1894-1979）の『ウイスキーと私』という本*が手元にある。

*竹鶴さんが日本経済新聞の『私の履歴書』に執筆したものを元にしてニッカ・ウイスキー社が昭和47年に発行したものである。

これはすばらしい本だ。彼は広島につくり酒屋に生まれた。三男で、家を継ぐ立場ではなく、攝津酒造という会社に就職した。その社長、阿部喜兵衛さんに見込まれてスコットランドに留学し、日本人としてはじめて本格的ウイスキーづくり技術者になった人である。

彼は、リタ・カウンというスコットランド人女性と結婚する。その事情もこの本に書いてあるが、じつにロマンチックな出会いだっただよう。彼女が日本にきて日本人になるためにどれだけ努力、苦労したか、これを読むと涙が出てくる*。

*オリヴ・チェックランドという人が書いた『リタとウイスキー』（日本経済評論社、1998年）がそのことを立証している。

彼はウイスキーの飲み方はいうまでもなく、料理についてもきびしい。

「宴会の料理にはいっさい手をつけない。目の前でつくる料理しか食べない。文化国家というものは、嗜好を高めることにある。」

そのとおりですね。竹鶴さんは、1979年8月、85歳のうらやむべき人生を閉じた。

5 永井荷風の日記

永井荷風（1879-1959）はいうまでもなく戦前、戦後を通じてわが国を代表する文学者の一人である。

彼が書いた日記、『断腸亭日乗』（岩波文庫、上下、1987年）というのがある。これはじつにすばらしい読みものである。とくに、太平洋戦争勃発前、1937年（昭和12年）から1945年（昭和20年、終戦の年）までの記述はじつに迫力が

ある。

圧巻なのは、1941年（昭和16年）6月15日の日記で、彼はこう記している。

「余は万万一の場合を憂慮し、一夜深更に起きて日誌中不平憤測の文字を切去りたり。また外出の際には日誌を下駄箱の中にかくしたり。今『翁草』の文をよみて慙愧すること甚し。今日以後余の思うところは寸毫も憚り恐るる事なくこれを筆にして後世史家の資料に供すべし。」（同書（下）、pp.142-143）

つまり、こういうことである。彼は戦争直前の日本政府、陸海軍の行動にきわめて批判的であり、彼が見聞きした彼らの不正を日記に記していたのだが、これが憲兵などの目に触れることを恐れ、書いたことを抹消したりしていたのである。しかし、たまたま『翁草』*について書かれたことを読み、「心中大いに恥じるところあり」それ以降、何ら恐れることなく、見聞きしたまま書きのこした記録である。これは一読すべきものだと思う。日本人は、よく「忘れっぽい」といわれる。また「過去のことは忘れましょう」という言葉が定着しているとさえいえる。しかし、「賢人は歴史から学ぶ」というのは古今東西を問わず、真理であろう。

永井荷風の日記はその意味で本当に貴重な記録であると思う。

*其蝸という人の作品らしいが、手もとの資料では分からないのでこのままとする。

（注）わたしの好きな小林勇氏の『厨に近く』に、「カツ丼を食いながら」という永井荷風の死直前のことを書いた一編があり、これにも触れたいが紙面の制約上割愛する。

6 バーンスタインと感謝

レナード・バーンスタイン（Leonard Bernstein, 1918-1990）は、有名なプロ

ードウェー・ミュージカル、『ウェスト・サイド物語』の作曲家であり、またカラヤンとならぶ20世紀後半を代表する名指揮者である。彼は、何回も来日して、とくに北海道に、若手の音楽家を育てるユース・オーケストラ・フェスティバルをスタートさせている。

彼が、1985年来日したとき、インタビューで次のように語った。

「幸せであるためには一日に一つの理由があればいい。今日はウニがとても美味しい。一つ理由があれば幸せになれるし、感謝の気持ちをもって幸せになれる。一日に一つでいいんだ。」(『レコード芸術』1985. 11)

わたしは彼と面識はないが、これを読んだとき、目の前に彼がいて、ニッコリ微笑んだような気分を覚えた。

そのとおりですね、といたい。「感謝の気持ちをもつ」と幸せを感じる。それ以来、そう心がけて、「レニー、そのとおりですね」とひとり言をいうのである。

B 仕事 (Work)

1 よいコミュニケーション——客も愛想

1993年のことであった。視察旅行でサンフランシスコへ行ったとき、有名なステーキ・ハウスで食事をした。たまたま日本人のビジネスマン二人がとなりにも坐った。彼らの食事が終わったところにウェイトレス(魅力的な黒人女性)がやってきて、“Have you enjoyed your dinner?”と言葉をかけた。一人は無愛想に、“It was too much.”と答えたが、もう一人は、“I think I've over-estimated my stomach capacity.”といたのである。ウェイトレスはうれしそうに、“I think so too.”とニッコリ笑った。

もうひとつ、別旅行でワシントンDCの郊外、ペンタゴン・シティのファッション・センターという、明るい吹き抜けのショッピング・モールに行っ

た。ブラウズ（日本語ではウィンドウ・ショッピング）していたら、タナリー・ウェスト（Tannery West, 西部の皮やさん）という皮革製品の店があった。入ったら、店番をしているのは背の高い黒人のセールス・レディである。微笑みながら「ジャスト・ルッキング？」という。日本人を見なれているらしい。「イーエス」といって店内を見まわしたら格好のショルダーバッグがあった。しかし、すぐを買うと荷物になるので他の店も見てからということにして、「I'll come back」と声をかけたら、「Okay」とニッコリした。ぐるっと一まわりしてからその店にもどった。「So I came back」といったら、またニッコリ笑って、「Welcome back」といつてくれた。

この二つの例からわたしがいいたいのは、「客も愛想が必要だ」ということである。おれは、わたしは客だ、という態度ではいいコミュニケーションはできない。「コミュニケーションとは、相手とのラポルト（rapport, 親しいお互いの理解, つながり）をどうやって築きあげるか、という問題の解決である」というのがわたしの考え出した定義だけれど、その気もちになるだけでもコミュニケーションはそれまでよりも上達しているはずである。

2 質問が授業の値打ち

1995年3月、硬式野球部の選手諸君をアメリカにつれていった。メンフィス、アーカンソー、ミシシッピの大学と試合をして、その年のシーズンに準備をするためである。そのとき、メンフィス大学、国際経営大学院（IMBA）ベン・ケディア院長さんの好意で、特別に講義をやらせてもらった。日本の規制緩和や、当時の「価格破壊」を中心に1時間ほど話したが、たくさん質問を受けた。また、中国から来ていた留学生が後で「大変よかった、サンキュー」といつてくれたので、うれしい思いをしたものである。

これまで本学で、わたしが不思議に思うのは、まず質問がほとんどない、ということである。たぶん、他の大学もそうだろう。なぜだろうか？

わたしの想像することはこうである。日本の大学は、むかしの帝国大学が

モデルになっている。本学が創立したころ、国立大学を定年で辞めた先生を採用しないと文部省の認可を受けられなかったらしい。そういうプライドの高い先生方のなかに、学生が質問をすると「なぜそんな下らない質問をするんだ」といばる、ごうまんな先生がいたのではないだろうか*。

*事実、私の演習を履修している学生二名がそう証言してくれた。

今は時代が違う。わたしは「質問することが授業の値打ちだ」とくり返し、くり返し大声でいっている。先生が一方的にしゃべる講義など、おもしろいはずがない。それだけなら、教科書、参考書を自分の部屋で読めばすむ。寝ころんだり、柔らかなクッションで、自分のいちばん楽な姿勢でできる。眠くなれば、目がさめたときにまた読めばいい。授業は、先生に「自分が疑問に思うこと、あるいは知りたいこと」を質問できる貴重な時間なのである。そうでなければ、わざわざ、高い授業料を払って時間をかけて大学にくるとんな理由があるのか？

質問のない授業は、わたしから見ると「下手を相手にやるマージャン」である。強い相手だったら絶対出せない危険パイも、この相手ならいいや、といって放る。それがとおる。つまり、授業がいい加減な低いレベルのものになるということである。

それでいいのかと思う。それでは大学ではないだろうといたいのである。

3 手紙を書こう

「アメリカ人に、最近、創造の精神が乏しくなってきたのは、文章を書く機会が少なくなったためだと言われている。文章を書くことは、人間の脳にだけすばらしく発達している創造性、思考力、意志力、上層の心（喜びや悲しみの心）の座である前頭葉を鍛えることである。」（林巨樹『書簡作法』1970, p.156.）

手紙を書く人が少なくなった。携帯電話で用が足りるのが最大の原因だろう。手紙を書くのはかなり頭が疲れることだから（それが、林さんのいう「前頭葉を鍛えること」なのだが）面倒だ、ということと、後で何か不利な証拠を残すことになりはしないか、という心配も理由の一つだろう。

わたしは電話が好きではない。必要なときは電話をつかうが、急がないとき、何か特別のメッセージを伝えたいときは手書きのレターにかぎる。

リンドバーグ夫人（別稿『海からの贈物』参照）も、書簡集で「電話なんかはないほうがいい。手紙が好きだ」と書いているし、キャザリン・グラハム、ワシントン・ポスト社主も、子どものときから母親と手紙の交換がひんぱんにあったそうだ。

わが国でも、若い人で手紙が好きでよく書くというキャリア女性が多い。

電話はかける人には都合がいいが、受ける人には迷惑なことが多い（テレホン・セールスがその典型）。手紙は受け取る人の気持ちを大切にしてくれる（通販や、どうしてもいいレターは見ないでごみ箱に放り込める）。ごぶさたしている人からの手書きのレターはじつにうれしいものである。

わたしは、チャンスがあれば手紙を書く。もらった手紙には必ず返事を出す。林さんがいうように、脳の体操になっていることを実感するのである。

4 わずかな才能でも

ヘミングウェイ（Ernest Hemingway, 1899-1961）に、『キリマンジャロの雪』（*The Snows of Kilimanjaro*）という短編作品がある。そのなかに、次のようなひとり言があって、わたしの好きな言葉になっている。

「彼は、その才能をつかわないでだめにしてしまったのだ。いつも、何かをやったということではなく、できるさ、と知っているばかりだった。」

レオナルド・ダ・ヴィンチも、次のようにいっている。

「鉄はつかわなければ錆びる。水もほうっておけば腐るし、寒ければ凍る。才能だっつつかわなければだめになってしまう。」

もう一つ、ロベルト・シューマン (Robert Schumann, 1810-1856) は、『音楽と音楽家』という本で、こう書いている。

「どんな人でも何らかの才能をもっている。自分は才能がない、などとグチばかりいって人生をぐずぐずすごすほど無意味なことはない。わずかに100グラムのスエーデン鋼から何百ものスイス高級時計のゼンマイができる。自分のもっている少しの才能を大切につかうべきだ。」

まったくそのとおりだと思う。自分も持っている、少しばかりの才能でも生きているうちにつかおうではないか。

5 ミステリーを原書で読む

商学部報第31号 (1999.6.20発行) に、わたしは『ミステリーを原書で読もう』という原稿を書いた。

要点は、次の二つである。

1. ミステリーを原書で読むことは、アメリカ社会の動きを早くつかむためにとても役に立つ。
2. 生きた英語が自然に身につく (つかえるようになる)。

わたしがここでもいいたいのは、日本では英語を「語学」だと押しつけているから学生は英語が上手にならない、ということである。そのもっともいちじるしい例は大学入試である。文法のコまかいことばかり多すぎる。電車のなかで、英単語のカードをめくったり、文法書を一所懸命見ている高校生がいかに多いことか。しかし、単語をたくさん暗記して、前置詞がinではなくてonであることを知っても、英語をつかえるようにはならない。

英語は、教えたり、教わったりするものではない、というのがわたしの数十年の経験から得た結論である。本人が英語の必要性を自覚するか、英語が好きなら、教室授業なんかよりもっといい方法はいくらでもある。その一つが、英語のミステリーを原書で読むことである。

上記、学部報で3冊紹介したが、ここでもう一冊紹介したい。シドニー・シェルダンの『ザ・ネーキッド・フェース（素顔）』（Sydney Sheldon, *The Naked Face*, 1970）である。ジャッド・スティーヴンスという精神分析医が、患者、秘書を殺害され、自分も狙われる。だれが犯人なのか見当もつかないまま、苦しむが、ハッピーエンドに終わる。単純な作品だが、さすが名手シェルダン、サスペンスに富んだおもしろい読みものになっている。

わたしが、ここで触れたいのは、この作品に登場する人物の魅力である。スティーヴンスが思いあまって、ノーマン・ムーディという私立探偵を訪れる。この探偵はほんのわずかしか登場しない（殺される）が、じつに魅力ある人物である*。そのセリフを紹介しよう。

——「敵がいらない？ わたしはいつもいうんですよ。敵ってのが人生のパンに少しばかり塩を足してくれるってね。（“I always say enemies give a little salt to the bread of life.”）」

——「わたしはいつもいうんですよ。貝殻がほしければ、海岸へ行きなさい、とね。（“I always say if you're lookin' for seashells, go to the seashore.”）」

こういうセリフを読んでいると、自然に英語がしゃべれるようになると思う。単なる会話ではない。気のきいた、わたしが好むスタイルのあるしゃべりができるようになる。

あらためて、諸君にミステリーを原書で読むことをすすめたい。

*エリザベス・ジョージ（Elizabeth George）という、これまたミステリーの名手がいるが、その『かれが生涯の驚き』という短編に登場する、カウリーという私立探偵のパーソナリティがこのムーディのそれにそっくりである。たぶん、参考にしたのではなかろうか。

6 プロの教員

わたしは、プロフェッショナルという言葉が好きだ。英和辞典を見ると「職人かたぎ、プロ根性」などとあるが、あまりいい響きではない。「プロとしての力量、気構え、誇り」ととらえたい（英語に、“professional pride”という成語もありますよ）。「さすが、プロだ！」といわせるような仕事ができる人といってもいい。

では、教員、先生という職業（仕事）についているプロとはどういう人だろうか。

よく、「教育は情熱だ」という人がいる。そして、自分は情熱では人に負けないから一人前、プロの教員だ、と思いこんでいるようだ。

わたしは、そういう人に「そうですか？ 本当ですか？」と意地悪く聞きたくなる。「ウソでしょう」といいたくなる。なぜか？ わたしはこういたい。「情熱なんかなくても、立派にプロの先生になれますよ。生徒・学生に何を教えるべきかということを的確に把握し、彼らを真実納得させる説得力をもっていればね」と。ただし、これは当然彼らが「この先生は情熱がある」と感じなければできないことなので、情熱をもっている、と思わせる力が必要だ。

情熱だ、としか思わない先生は何も見えていない。そういう先生がとかく体罰事件を起こす。そして「愛情のあまり殴ってしまった」などといいつけをしている。こういう人はプロではない。

「何を教えるのか、どう教えるのか」ということを十二分に知って自信をもって実行できる人、それがプロである。将来、教員をめざす学生諸君は、このことをよく考えてほしいと思う。

7 小さな約束を守る

「小さな約束を守らない人が大きな約束を守ったためしはない。小さな

約束を守らない人は信用されない。だから、どんな小さな約束も大事にすることだ。」(矢部正秋『ユダヤ式交渉術』, 三笠書房・知的生きかた文庫, 1980, p.156.)

授業で口が酸っぱくなるほどいったことだが、学生諸君にもう一度いいことがある。それは、諸君がわたしの演習に申し込んだときに、「無断欠席をしない」と文書で約束していることである。

その後、それを忘れてしまったのか、どうでもいい、と思っているのか、欠席しても届けられない人が何人もいる。私は、約束したことを守らない人に何を指導しても無駄だと思う。

矢部さんがいったことと同じことを、わたしが新入社員のときに先輩が教えてくれた。「小さな、簡単なことだからどうでもいいのではない。簡単なことだから実行すればいい。そして、それは大事なことなのだ」と。そのとおりであることを、私は過去四十数年の人生経験で確信するようになった。そのことを教えてくれた先輩にいまも感謝と尊敬の念をいただいている。

8 わかりやすく

「私はむつかしい言いまわしが苦手な男である。内容のあることをやさしい表現で言うのがいいとある時期から思うようになった。」

遠藤周作という有名な作家が、日本経済新聞の『私の履歴書』27回目(1989年6月28日)に書いた文章である。

うれしかったね。これこそ、わたしが日ごろから信じ、実行してきたことだから。それをあの著名な作家がいつてくれたのだ。

そうでない人がたくさんいる。むずかしいことを分かりにくいように、やさしいことをことさらにむずかしくいう。そういう人が世間にかくに多いことか。とくに大学の先生に多い。こういうのはサボリ、ゴマカシである、とわ

たしは断言する。

ある人が、デカルトの言葉として、「難しいことはやさしく、やさしいことは深く、深めるときは楽しく」というのを紹介していた。正に名句、そのとおりだと思う。

9 王様とかしこい消費者

「消費者は王様である (“Consumer is king.”)」という言葉がある。物やサービスを供給する人は、消費者のいうことを正しいと考えるのがいちばんもうかる、というような意味だが、そうだろうか？ わたしは、王様は必ずしもかしこい消費者ではない、といたい。

なぜ、こんなことをいうかというと、わたしが学長になったとき以来、「学生諸君は消費者である。大学はこれまで生産者（大学）が主役であったが、これからは消費者（学生）主役に変えなければならない時代になった」といつづけてきたからである。

学生諸君は高い学費を納めているのに、それに見合う商品、つまり教育や指導を受けとっているのかな？、と思う。王様でありながら、かしこい消費者とはいえないのではないか、ということである。

それで連想する。最近海外旅行熱が盛んで、とくに中国に人気があるようだ。日本人は中華料理が好きでよく食べに行く。しかし、注文のしかたが下手だそう。まずいものを出されても文句をいわないで、あとであの店は美味しくないと言ってしまう。中国の人は、まずいと「こんなまずいものを出すのか」とつっ返すそう。そうすると、このお客は味にうるさいから美味しいものを出そう、というふうになるらしい*。

*私の授業を、1999年度に履修した中国留学生、孔瑞さんが正にそのとおりのことを話してくれた。

これを授業にたとえると、納得がいかない授業には堂々と「先生の教え方

は不満です、理由はこれこれです」と主張すべきである。そうでないと、教える方はいい加減になってしまう（別項、「質問が授業の値打ち」参照）。納得がいかなければ率直にそのように発言する。それが「かしこい消費者」への第一歩である。そのような学生を一人でも増やすのが、われわれ教員の責務なのだ、とわたしは考える。

10 寺田寅彦の『蓄音機』

わたしは、寺田寅彦（物理学者1878-1935）の随筆が大好きで、全集はもちろん、もち歩きに便利な文庫本『柿の種』など何冊も買っている。好きな文章はたくさんあるが、ここにぜひ紹介したいのが『蓄音機』*である。

*寺田寅彦全集、第3巻、随筆三、生活、岩波書店、1997年。

この随筆は、彼が中学3年のころ、蓄音機が発明されてから16、7年後であるが、文学士何某が蓄音機を携えて来校し、実験と説明をしたときの記憶を書いたものである。その文学士は講演の後、蠟管に口をあてておどろくような大きな声で「ターカイヤーマーカーラア、」と歌い出したそうだ。そのときの印象を、彼は「つめたい薄暗い岩室の中にそよそよと一陣の春風が吹き、一道の日光がさし込んだような心持がした」と記している。

彼が後段で、次のように述べていることがわたしがこの随筆を紹介する理由である。

「この1日の出来事はどういうものか私の中学時代の思い出の中に目立って抜き出た目標の一つになっている。あの時にあの罪のない里謡から流れ出た自由な明るい心持は三十年後の今日まで消えずに残っていて、行きづまりがちな私の心に有益な転機を与える。業に疲れ生に倦んだ時に色々の「高い山」を唄う。そうして新しい勇気と希望を呼び返すのである。」

この文の後、蓄音機の技術的な問題、社会的影響などについて何と10ページも述べてから、次のように書く。大事な部分なので同じ活字ポイントで引用する。

「蓄音機が完成に近づくに従って生ずる新しい利用方法が考えられる。たとえば学校の講義のあるものをすべて蓄音機ですませることはできないかという問題が起こる。私は蓄音機や活動写真器械で置換え得られるような講義は本当の意味の教育的価値のないものだと思う。思い出に浮かんでくる数々の旧師から得た本当に有難い貴い教えは、決して書物や筆記帳に残っている文字や図形ではなく、蓄音機などで再現することのできない機微なものであることに気がつく。教育の効果はその場限りの知識の商品切手ではない。（アンダーラインは青山）生徒の生涯を貫いてその魂を導き引き立てる貴い有難い影響にあるのである。」

わたしはこの文章を読んで本当に感銘を受けた。教育とは、正に彼がいつていることだと思う。これが書かれたのは大正11年（1922年）であったが、蓄音機をテープやビデオといいかえてみれば現在にもまったくそのとおりいえることである。このことは教育についての永遠の真理ではないだろうか。

（お断り。寺田寅彦の文章はもう少し長いのであるが、紙面がかざられているので、省略し、現代表記に書きなおしたところもある。）

11 新商人論について

わたしは、1996年に『新商人論序説——新たなグレート・マーチャントの時代を希求して——』という論文を執筆した*。

*中央学院大学30周年記念論集『国際化時代の法と経済・社会』（1996.10）

主旨は、「1990年代に入り、いわゆるバブル崩壊によってわが国の戦後高度成長時代は終わり、混乱期に入った。戦後の繁栄は強力な行政指導、産業政策によって達成されたが、40年にして制度疲労の極に達した。きたる21

世紀は偉大なる商人によって開かれるであろう」という主張である。

わが国においては伝統的な「士農工商」という階級意識が現在もあとを引いている。しかし、商人、マーチャントという呼称には、「尊い人びと」という含蓄がある（旧約聖書、イザヤ書第23章、第8節）。そして、現代においても英国エリザベス女王二世、米国ブッシュ大統領をはじめとして西欧の国王、元首がすすんで自国の輸出拡大、産業振興に大きな役割を果たしていることは新聞報道で実証されている。

わが国の、中等・高等教育で、商科、商学の地位がしだいに低下するような傾向がみられるが残念なことである。そのような経歴を選んだ人たちの自己主張不足である。わたしを含め、商科、商学部出身者はプライドをもって、将来のわが国リーダーたるべく努力をすべきである。

商人には、確固たるリスペクタビリティ（尊敬すべき資質）があることは、多くの資料によって証明されている。これを自覚し、その上に立って行動する人格を鍛えたいものである。

わたしの『新商人論序説——新たなグレート・マーチャントの時代を希求して——』をぜひ読んでいただきたい、と思う。

C 経験から (From Experience)

1 セント・キルダのポリス

セント・キルダ・ロードは、オーストラリア、メルボルンのシティから南東方向に走る長さ約5キロメートル、街路が美しい目抜きの大通りである。周囲にはアルバートパーク、メルボルン・クリケット競技場、コンサート・ホールなど、目白押しに並んでいる。

わたしがシドニーからメルボルン勤務を命じられたのは、1962年3月で、最初このセント・キルダ・ロードに近い、プランというサバブ（郊外）のアパートに住んだ。

ある晩、遅くまで飲んで（当時、メルボルンでは午後6時にパブは閉店し、レストランでも酒は出さなかったから、たぶん、だれかの家に呼ばれたのだろう）、車で帰宅しようと、セント・キルダ・ロードを走っていた。午前2時ころだったと思う。かなりスピードを出していたにちがいない。後ろからパトカーが追い抜いて「止まれ」と合図する。止まったら「車を降りてカギをかけろ、キーを渡せ」という。渡したら「これ以上運転したら危い。明日、どこそこのポリス・ステーションにキーを取りにこい」というなり、走り去ってしまった。

メルボルンの夜中2時である。流しのタクシーなどいるわけがない。困ってしまったが、近くのアパートに親しくしていた丸紅の駐在員、山田健二君*がいるのを思い出して、真夜中で悪かったがたたき起こして泊めてもらった。

翌日、指定されたポリス・ステーションに行ったら、ニッコリ“Be careful, sir.”とってすぐにキーを返してくれた。意外だったが彼らのやり方はじつにスマートで、適切だったと思う。ドライバーとまわりの人の安全を考えたならこれ以上の対応はない。プロそのものだった。日本ではこうはいくまい。わたしにとって、いまでもときどき思い起こすことの多い（安全、思いやり、など）エピソードであった。

*ケン山田とは、よく一緒に飲み遊んだ。同い年だったと思う。悲しいことに1995年、脳溢血で急逝した。

2 ダイヤモンドでもすり減る

もう20年も前になるが、ディスクという会社で海外事業の顧問を5年ほどやったことがある。第一製砥所というグラインダーや切削用の工具を作る会社であったが、そのような製品は競争がはげしいため利益が低下する一方だった。同社は、拡大しつつあった半導体市場に目をつけ、ダイヤモンドを原料にした超薄型の切断ホイール（直径数センチの丸鋸である）とそれを精密に

コントロールする装置を開発した。半導体は、シリコン・ウェハーという単結晶素材の上に数ミリ平方の回路を焼き付け、切り離してつくる。各回路のすき間は0.1ミリ以下であるから、超精密な切断技術がなければ大量の不良品が発生する。ディスコ社は、いまこの分野で世界市場をほぼ独占しているのである。

この会社で、切削の基礎的なことを教わったが、いちばん印象に残っているのは、「ダイヤモンドでも、豆腐を切つてすり減る」という話である。刃物は鋼やセラミックのような高硬度の材料でつくるが、どんなに硬い材料の刃物でも、何かを切ればすり減るものだ、というのである。なるほど、板前さんが毎日包丁を研いでいるのを見れば分かる。

おもしろいと思った。わたしは、この話をまったく違うことにも応用できると感じたのである。

たとえば、立場が強い人と弱い人の交渉や争いで、強い人が一方的に勝てるかというところではなく、勝者にも何らかのすり減りが生じるのだ、と考えることができる。そう思うと自信が出てくる。「あいつにはとてもかなわない」と思っても、完敗、ゼロ負けはない。工夫すれば譲歩を引き出せる、という発想が出てくる。

いかに得点差を縮めるか、というゲームに変えるわけだ。これは、日本人の弱点である「オール・オア・ナッシング」な思考を柔軟にするためにもきわめて有効だと思う。

3 1988年アメリカの印象

1988年7月～8月、学生を二十数名引率してアメリカ、テネシー州、メンフィス州立大学に短期研修に行き、その後、各地を観光旅行した。何か所かで印象にのこるできごとがあったので、そのなかから二つ紹介する。

ア・ロット・オブ・ツイスト

8月2日だった。メンフィスを立ってニューオーリンズに行くとき、ダラス空港で待ち時間があったので、バーへ行った。バーテンはやや太目の女の子だった。“May I have a very dry martini, please.”といたら、“Olive or twist?”と聞く。“A lot of twist, thank you.”と答えたら、ニッコリ笑って腰を左右にふって、ツイスト・ダンスのしぐさをしてくれたのですっかりうれしくなってしまった。こういうのが本当のサービスというのではないだろうか。日本のデパートの売り子など、言葉ばかりでいねいだが、心を感じさせる応対に接することが少ない。アメリカに学ぶことがたくさんあるではないか、と思ったものである。

半ダースは7個か？

フロリダ、オーランドのディズニー・ワールドでレンタカーをして、ケープ・カナベラル、ココア・ビーチに行った。まだ見たことのない、大西洋をどうしても見たくなつたのである。ココア・ビーチの長い海岸線、海水浴客のにぎわい、紺碧の大西洋を見て満足した。気まかせにショッピング・センターに入ったらオールド・フィッシュ・ハウスというシーフード・レストランがあったので、これこれと入りこんで、生牡蠣とロック・シュリンプを注文した。最高に美味しかった。車を運転しているので、ビールもワインも飲めないのが残念だった。オイスターは半ダースといたのに、出てきた皿に「7個」のついていたので思わずニッコリしてしまった。だれかに聞いた駅の時計の話*を思い出した。こういう、おうような超常識、とでもいいたいものがアメリカにはある。私はそれにとてもひかれるのである。

*ある駅で、待合室とプラットフォームの時計の時刻が合っていないので、乗客（日本人にちがいない）が駅員に「合ってないよ」と言ったら、「同じだったら二つおいとく意味がないじゃないか」といったという小話。

4 席のゆずり方

この文章の目的は高齢者や身障者に席をゆずれ、などと説教することでは

ない。「席をゆずるときは言葉が大切だ」ということである。わたしの経験を二つ紹介しよう。

京都に出張して新幹線に乗ったときである。わたしは三人がけの席の通路側で窓側の二人の席には小さな子どもづれの女性がいた。バッグをいくつも持っていて窮屈そうにしている。別の席が空いていれば移ったほうが良いなと思っていたら、うまい具会に名古屋でななめ向かいの席にいた客が降りた。列車は新大阪行きだったから、次の京都で別の客が乗るはずはない。そこで「どうぞ、おつかいください」といってゆずった。「あ、スイません」とその女性はいつてくれたが、もし、わたしが黙って移動したら、たぶん子どもがうるさいから移ったんだな、としか思わなかったにちがいない。いつてよかったと思う。

もうひとつ、数年前、メルボルンからの帰りの飛行機で、となりに太った70歳くらいのおばさんがすわった。聞いてみたら、ロンドンにいる娘に会いにいくんだという。聖書を読みながら編物をしている。とにかく太っているから窮屈そうだ。そこで、しばらくしてから、“I’ll move over, so you can have more room.”といて別の席に移った。彼女は、“Oh, thank you.”と、ニコリ笑ってくれたが、このときも黙って移ったらあまりいい気持ちはしなかったにちがいない。成田に着いたときも、お礼をいつてくれたからいい気分になった。

席をゆずるといふ親切心であっても、言葉が足りなければ誤解されるか、せつかくの気持ちを好意と受け取ってもらえないのである。若い諸君は、はじめて会った人にもものをいうのが苦手な人が多いようだから、わたしの経験を紹介したのである。

5 ユダヤ人から学ぶこと

わたしは商社勤務時代に多くのユダヤ人とつきあう機会があった。彼らとのつきあいの経験から学んだことが多い。そのごく一部を紹介してみた

い。

金銭感覚について

ユダヤ人は金（カネ）に汚い、とよくいわれる。文芸作品のなかに書かれていることはもちろん、無数のジョーク、小話がある。実際に体験して驚いた人もたくさんいるだろう。

ケチだ、汚い、とまでいわれる習性をなぜ彼らもつにいたったか？ わたしの結論は、「ケチなのではない。『いざ、というときのために、ピター文なりともむだにしてはならない』という意識が体に浸透しているからだ」と思う。

ユダヤ人迫害の歴史は古い。もっとも記憶に新しいのは第二次世界大戦時のナチ強制収容所だろう。あのとき、リトアニアという、バルト三国の小さな国の一つに杉原千畝（ちうね）という日本の領事がいて、危険にさらされたユダヤ人を脱出させるために何日も徹夜をして数千通のビザを発行して助けたのは有名な話だ。

ユダヤ人は、ふだん平穩無事な暮らしをしていても、いつも危機意識を抱いている。逃げ出さなければならぬときに、先立つものはお金である。ビザ1枚取るだけでもどのくらいお金がいるのか、見当がつくはずもない。その日のために彼らは1ペニーを節約することにこだわるのだ、と思う。

約束の確認

わたしは、次女がメルボルンに住んでいるので、年に2、3回くらい行って、2週間くらい滞在する。いつだったか、娘がときどき世話になっているユダヤ系ベルギー人夫妻を夕食に招待することにした。

午後7時の約束だったが、直前に電話があつて、「数分遅れる」という連絡だった。「なんだ、数分くらいならわざわざ電話することもないじゃないか」といい合つたのであるが、「待てよ」とわたしがフト思ったことがある。

それは、遅れるという連絡のためではなく、「今晚、ご招待いただいでい

ますが、間違いないですね」と確認したかったのではないかと、ということである。彼らは、耳で聞いたことをそのまま呑みにはしない。いかなることも自分で確認しなければ行動しない。その用意周到さには脱帽して学ぶことが多い、と思うのである。

6 アウシュヴィッツを訪れて

1967年2月、わたしはポーランドのアウシュヴィッツ、ナチ収容所跡に行った。

当時、日本人でここを訪れた人はまだ少なかっただろう。わたしは商社で鉄鋼用原料炭の輸入を担当しており、日本の鉄鋼業界は高度成長の真っただなかであったから世界中に原料炭供給源を求めていた。ふつうならポーランドのような遠い国から石炭のように運賃負担力のない商品を輸入する（ポーランド南部、カトヴィツェというところからバルチック海に面したグダニスク港、当時スエズ運河は封鎖されていたから大西洋、喜望峰、インド洋経由で日本に輸送された）などということは考えられないのである。

わたしは、八幡製鉄（いま新日鉄）の水野勲常務のおともをしたニチメン金田晟取締役役のカバンもちで、ポーランド石炭公団と買い付け交渉をするため出張をし*、水野さんの希望でアウシュヴィッツを訪れたのである。

*ついでのことだが、公団からおみやげにもらった1965年ショパン・コンクールで優勝した、マルタ・アルヘリッチのレコードをいまでも大切にしている。

ナチ収容所は東ヨーロッパ各地にあったが、もっとも大きかったのがポーランド、クラカウの近くにあるアウシュヴィッツである。1940年から1945年までに、300万から400万人がここで虐殺された、と伝えられている。収容所あとにガス・チェンバーで殺されたユダヤ人の毛髪でつくった毛布など、山のようにおいてあった。入口のアーチ門に、“Arbeit Macht Frei.”（労働が自由をもたらす）という表札があったのが印象的だった。

わたしは、かなり写真を撮ったが、あとでうっかりフィルムを巻きもどさないうちにカメラの裏ぶたを開けてネガをかなりダメにしてしまった。恐ろしいな、収容所で死んだ人たちの怨念だな、と思ったものだ。

7 無理をしても

わたしは、もともと消極的な性格で、子どものときからおとなしい、気が弱い、神経質だ、などといわれてきた。「卑屈だ」とすらいわれたこともある。しかし、60歳を過ぎてから性格を変えることができたと思う。そのとき以来、わたしは自分の行動原則を次のように決めている。

1. むりをしても、ものをいう、
 2. むりをしても、前が出る、そして
 3. むりをしても、引き受ける、
- この三つである。

日本人は、徳川の鎖国時代以来、「すべて控えめに行動する」という考えかたで支配されてきている。ものごとをはっきりいわない、でしゃばらない、自慢しない、目上・年上に反抗しない、つまり階級社会、上下関係を維持することが徹底的に守られてきた。

しかし、それが周囲との摩擦を避ける安全な生きかたかもしれないが、たった一回しかない人生がそれで幸せだろうか？ 商社勤務、そして、大学教員になり商学部長、学長を勤めた経験からつくづくそう思うようになった。

積極的攻めに生きる。年上、先輩のいうことでも疑問をもつときは遠慮しないで「ノー」という。叱られても、失敗しても後悔しない。それが本当の生きかただ、と決心すると幸せを感じる。諸君にもそのように行動することをすすめたい。

8 順番をゆずろう

わたしが学長をしていたとき（1993-97）、我孫子市天王台にアパートを借りていた。近くにスーパーがあって、たまたまキャベツ1個を買ってレジに並ぼうとしたら、一瞬の差で子連れの女性が先に入った。かなりたくさん品をカートにつんでいる。しょうがないな、と思ったが、彼女が振り向いて「どうぞお先に」という。「え？ よろしいんですか？」と聞いたら、ニッコリ笑って、「ええ、どうぞ」という。彼女は、キャベツ1個だけを目ざとく観察して気を利かせたのである。こういう人にはめったに出会えない。気のせいかな美人に見えた。レジがすんだとき、「スイません」とお礼をいったが、見習わなければいけないな、としきりに思った。

数年前、オーストラリア、メルボルンに行ったとき、同じような経験をした。ビクトリア・アーツ・センター地下のチケット売り場へ行ったときのことである。コンサートのチケットを買って帰ろうとしたら、幼稚園の子どもらしい一団を連れて若い女性の先生とぶつかった。エスカレータは狭いから、遅れるとしばらく待たなければならない。つい、急ぎ足になってしまった。そうしたら、その女性は子どもたちに「待ちなさい」とストップをかけて、わたしに「どうぞ」とサインしてくれたのである。ありがたい気持ちと恥ずかしい気持ちがいっしょになった。

あとになっても何分も遅れはしない。なぜ、こっちが先に譲らなかったのか、と反省したんですよ。

D たのしみ・夢想 (Hobby; Daydream)

1 発見するよろこび——その1

わたしの大好きな歌のひとつは、トニー・ベネット（1926-）* が1962年に大ヒットさせた『わが心のサンフランシスコ』（“I left my heart in San Francisco”）

である。

導入部はレシタティーヴォ。次のように節をつけてひとり言をつぶやく。

“The loveliness of Paris seems somehow sadly gay.
The glory that was Rome, ‘tis of another day.
I’ve been terribly alone and forgotten in Manhattan
I’m going home to my city by the bay.”

そして、“I left my heart in San Francisco...”とハートフルに（心をこめて）歌い始めるのである。

長い間、レシタティーヴォの、“The glory that was Rome”のところが気になっていた。妙な英文だと思っていたのである。しかし、ポー（Edgar Allan Poe, 1809-1849）の詩集を読んでついに謎がとけた。彼の、『ヘレンに』（“To Helen”）という詩に、“The glory that was Greece, the grandeur that was Rome”という一節があるのである。これを発見してじつにうれしい思いをしたのである。

*2000年3月19日、彼がサントリー・ホールでコンサートをやり、満席だった。オールディーズなのに若い人もたくさんいて、ファンの層の厚さにあらためて感心した。フランク・シナトラとともに20世紀後半を代表するエンターテイナーの双璧であろう。

2 発見するよろこび——その2

ハンフリー・ボガート（Humphrey Bogart, 1899-1957）といえ、何といっても名画『カサブランカ』だろう。第二次大戦中、1942年につくられたこの映画は、ハリウッドが世に送った名作中の名作である。

ボガート演じるリックの酒場、リックス・カフェ・アメリカン、ある真夜中にイングリッド・バーグマン演じるイルザが現れる。彼女は、もう客もいなくなったお店にぶらぶらしているピアニスト、サム（ドリー・ウィルソン）

に近よって、「ひさしぶりね、サム、あの曲をやってよ、『時の流れいくまに』(“As Time Goes By”)を」という。サムは「そんな曲は知りませんよ」とそっけなく答える。バーグマンが、「あんた、以前はもっとウソが上手だったわよ、唄ってあげるわ(“You used to be a much better liar, Sam. I’ll hum it for you.”)」と歌い始める。つられて、サムがピアノを弾きはじめ、歌い出す。

ドアをバツと開けてボガートが登場する。「何をやってるんだ、その曲をやるなっていったらろう」と叫んでイルザと目を合わせるシーンは忘れられない。

この場面のテープを何回聞いたかわからない。

それで、最近気がついたのは、ボガートの魅力の大半はその声のよさにある、ということである。ルックス(容姿)、演技力はもちろん俳優の必須条件だが、声のいいことがもっと重要だという気がする。

そして、声は、ショー・ビジネスだけではなく、一般の仕事でも重要だ、ということがだんだん認識されつつあるようだ。ボイス・トレーニングということが歌手や俳優だけではなく、ビジネスマン、ビジネスウーマンにも必要になった時代なのである。

3 レコードと生演奏

高城重躬(たかじょうしげみ)さんという音楽評論家の書いた『レコード音楽論』(共同通信社, 1981)という本がある。そのなかに、あらえびす*のいったことが書いてある。次のようなことだ。

「音楽評論家が、エフレム・ジンバリスト(ヴァイオリニスト, 1889-1985)の演奏会に行って技量が落ちたなどと言っているのは笑止千万だ、レコード・ファンは、高いお金を払って買ったレコードを何十回も聞いている。彼の技量が落ちたのは3年前から分かっていた。」

*「あらえびす」は、野村胡堂(1882-1963、『銭形平次捕物控』シリーズ——吉田茂がわたしの愛読書だと言ったのが有名だ——の作家である)が、クラシック音

楽レコード収集家としても有名で、彼がレコード評論につかった筆名である。SP（78回転で、30センチ盤でも片面3-4分だった）時代に数千枚ものレコードを所蔵していた。岩手県出身で、花巻市に彼の博物館があるそうだ。

この話は、大学の授業にも共通していえることだと思う。1回だけ聞けば「なるほど」と思うような講義でも、何回も聞いているうちに「これはホンモノだ」というのと「これはインチキだ」というちがいが、学生でもわかるのではないだろうか。教授らが学生をなめてかかると、自分の墓穴を掘ることになると思うのである。

4 マティーニなくしては —— My Martini Philosophy ——

わたしは趣味人としては一人前でないと自覚しているが、酒を飲むことについては一家言をもっているとうぬぼれている（もう、45年以上も飲んでいますから）。飲酒を罪悪視する人もいるが、もちろんその人の自由である。しかし、キリストだって最後の晩餐で弟子にワインをすすめているのだ。悪かろうはずはない。日本の近代教育の創始者、福沢諭吉すら、

「このとおり幼少のころから酒がすき（数寄）で、酒のために有らん限りの悪いことをして～（福翁自伝）」

といっているのである。わたしごとき凡人が酒を飲むのは問題にするに値いしないであろう。

とくに、わたしはドライ・マティーニというカクテルにながい間魅せられてきた。

マティーニは、もっともシンプルなカクテルである。極端に言えば、ジンをたっぷりの氷でくるくるとかき混ぜ（stir）ただけ、といっていいものだ。しかし、マティーニのファンはつくりかたにこだわる。本当はもっと詳細に論じたいが、これ以上は書かない。

ただ、マティーニというカクテルが20世紀前半のアメリカ文芸に与えた

影響ははかり知れない、そして、この単純な飲みものがかもし出す独特の知的、ロマンティックな雰囲気は他のものと比較を絶する、とだけ書いておきたい。このことは数々の文学作品や映画で立証できる。

で、少し、アングルを変えて、国際ビジネスの機会をもつ卒業生諸君にアドバイスしたい。海外の取引先の幹部、とくに経営責任者（CEOという）にアポイントをとってそのオフィスを訪れる。たぶん、昼間でも「どうです、なにか飲みますか？」とすすめてくれる。そこで、“Thank you, may I have a very dry martini?”とでもいえば、一目おいてくれますよ。それを、飲みながら「昨夜のヴィオレッタはすばらしかったけれど、アルフレードはいまいちでしたね」（ヴェルディ、『椿姫』）などという会話をするのが、国際ビジネス交渉の第一歩になる。

5 ポーカー・スクエア

これは、演習やプロゼミで授業外の集まり（パーティ、合宿）に好適なゲームとして、わたしが既存のカード一人遊び（ソリティア, *solitaire*, ペーシェンス, *patience*ともいう）を発展させたものである。たった1組のカード、52枚で何人でも参加できる。


























〔目的〕

縦横5つづつ、計25の枠のなかに、開かれたカードを順番に書きこみ、高いスコアのポーカーの手がそろうようにし、縦横合計スコアを競うこと。

〔プレイ〕

ディーラーがシャッフルしたカードから、2枚づつ開いて読み上げる。プレイヤーは各自そのうち1枚を選んで、5×5の枠のなか、どこでも好きなところに記入する。選ばなかったカードは捨て札となり、再び使うことはできない。つまり、52枚のうち、50枚が開かれ、そのうち25枚を使うわけである。

プレイの実例

					横スコア ↓	
 A	 A	 2	 Q	 8	2	
 K	 K	 A	 K	 8	10	
 Q	 Q	 4	 Q	 8	10	
 4	 J	 J	 J	 9	10	
 10	 10	 10	 10	 5	50	
縦スコア→	20	100	20	2	10	234
					↑	トータル・スコア

ポーカーの手とこのゲームのスコアを下に示す。

Royal flush (同じスーツのA, K, Q, J, 10)	100
Straight flush (同じスーツの5枚続き札)	75
Four of a kind (同じ数の札4枚)	50
Full house (3枚札と2枚札の組み合わせ)	25
Flush (同じスーツの札5枚)	20
Straight (5枚続き札)	15
Three of a kind (3枚札)	10
Two pair (2枚札2組)	5
One pair (2枚札)	2

プレイの例を示しておく。冒頭に書いたように、1組のカードがあれば何十人でも、競うことができる、まさにパーティ向きのゲームである。オリジナルは1枚ずつめくるのだが、2枚めくるように工夫したことでいっそう面白くなったと思う。

6 ラバウル風ステーキ

ニューギニアの右肩に、ニューブリテン島というのがあって、そのバナナのようなかたちの島の東北端にラバウルというところがある。太平洋戦争のとき、日本海軍の航空基地があって「ラバウル小唄」という軍歌がヒットした。わたしの好きな歌の一つである。

ラバウルを訪れたのは1965年で、木材の輸出業者と会いに行くためだった。個人業者で、おもしろい男だった。何回かいっしょに食事をしたが、あるランチのときTAA（当時のオーストラリア国営国内航空会社、その後カンタス航空に合併された）の美人スチュワーデスをつれてきた。Ansett（民間航空会社）の子とかわるがわるデートしてるんだ、などと豪語していた。

忘れられないのは、彼の家と呼ばれて、現地人のサーバントがステーキを料理してくれたことだ。ステーキに切れ目を入れてうす切りのガーリックを挟み込む。網にのせて直火で焼く。ガーリックは、外の部分は焦げるが肉にはさまっているところは半生である。じつに美味しかった。

これを、わたしはラバウル風ステーキと呼んで、自分でもときどきつくるスペシャル料理の一つである。

ついでだが、このときはじめてピジン・イングリッシュ（Pidgin English）なるものを耳にした。異文化の刺激を強く受けた出張だった。

7 キャプテンの夜明け*

どこからともなく、その人が現れて、「おくれました、すみません」と、

あたまを下げた。緑の着物に紅の帯姿である。

三人は、細い道をゆったり歩いて、下って行く。もう、暗いのだけれど、海がホンノリと明るい。風がないでいる。波がきらきら光る。左へ、左へ、と曲がって、さらに降りていくと、少しづつ家なみが目に入ってきた。明かりのある戸口の一つに立ち止まって、その老人がニッコリと、「こちらです、どうぞ」といった。

間口は二間くらいだろうか、焼津、山口乙吉の家のような、素朴でしかも雰囲気になんともいえない暖かみがある。奥の方にはうす明かりが見える。「こちらへどうぞ」と、迎えに出た人が案内をしてくれた。

「上がりましょう」

土間に入って、下駄を脱いだ。ここもせまいところで、すぐに階段があって、上がると、障子をあけた部屋の正面に海が見える。小さな床の間がある。卓に座いすが三つ。

床の間には、一輪挿しに赤い薔薇がさしてある。テーブルを見ると、さっきは見えなかったが、蘭のようだ。紫色だ。

「海は、あとにしませう」と老人はいい、窓を閉めて床の間をライトアップした。掛け軸は何もない。花だけがクッキリと浮かび上がった。

「よろしいでしょうか？」しずかな声が聞こえて女が徳利を2本もって入ってきた。

色が、黒か、茶色か、金色かわからなかった。杯も同じだった。

「夜は長いですよ」、老人はいい、いつのまにか杯に酒をついでくれて、その杯は小さいかと思つたらとても大きい。

「ま、乾杯みたいな俗っぽいことはやめましょう」

くちびるをつけると、温かいお湯のようで、しかもトロリとした味わいがする。

「おいしいですね。なんというお酒ですか、なんて聞いてはいけませんね」と、その人がいうと、老人は「おわかりですね。いいお酒はいいので、それが灘でも、越後でも、どうでもいいんです」とニッコリした。

外はまだ暗い。波の音がかすかに聴こえる。

*この一文は、吉田健一の『金沢』に強いインスピレーションを感じて書いたものである。

8 あるお店で

午後6時のチャイムが静かに鳴りひびくと、カポが入ってきた。ホワイト・ディナー・ジャケット，ミッドナイト・ブルーの蝶ネクタイ姿だ。

まず、バーのカウンターへ行って、グラスを2個、ランダムに手にとる。光に透かしてみると、ごくわずかだが縁に水あかの跡が見える。

「みどりくん、スタッフを集めてください。」

「ハイ」と答えて彼女は消える。

たった4人だが、すぐにバーの前に勢ぞろいした。みな、ドレスアップして、上気した顔が輝いている。

カポがいう。

「見えますか？ このちょっとした汚れ」

「きびしいお客さんはみのがさないんですよ。私が理想とするバーはね、すべてが完璧であるべきだ、ということです。ま、世のなかには完全100パーセントというのはない。ゴールド・インゴットも、ファイブ・ナイン、シックス・ナインですね。しかし、かぎりなく100.0に近づく、近づけよう、そういう気もちが緊張感とたのしみをつくりだして、お客さんにもご満足いただけるんですね。」

E 思索 (Thought)

1 人生に離別なかりせば

人生無離別　　人生に別離なかりせば
 誰知恩愛重　　だれが知る恩愛の重きを

岩波書店の会長だった小林勇氏が、がんセンター総長・久留勝博士が亡くなったときに「向日葵（ひまわり）を写生し賛に東坡を書いて夫人に贈った」言葉である*。

*昭和51年9月から1年間、日本経済新聞夕刊に連載した『厨に近く』という、料理、食べものと小林氏が出会った人々の記憶を書いたエッセーの第一編、『高原の秋』の終わりの文章である。

わたしは交際が広いほうではないが、つきあいを大切にしたいと思う人はいる。その何人かはもうこの世にいない。ニチメンに同期で入社した中島君。彼は英語がうまかったので早くにロスアンゼルス駐在員を命じられた。まだ20代だったが帰国送別会のあと、自動車事故で亡くなってしまった。

もう一人、丸紅の山田君のことは別稿（セント・キルダのポリス）に書いた。彼はわたしと同年だったが5年前に脳溢血で急逝した。

ほかの友人たちのことも思う。そして、小林勇さんの好きだった東坡をつくづく「そのとおりですね」といいたいのである。

2 『海からの贈物*』について

* Ann Morrow Lindbergh, *Gift from the Sea*, 1955, 吉田健一訳, 新潮文庫, 1967.

小冊子である。400字180枚ほどしかない。しかし、くり返しくり返し読みなおしたい内容の本だと思う。訳者のあとがきを少し引用する。

「著者は大西洋横断飛行に最初に成功した有名なリンドバーグ大佐の夫人で、彼女自身も世界の女流飛行家の中では草分けの一人であり、また今度の大戦の後ではヨーロッパに渡って罹災民救済事業に挺身した。しかし、本書には著者のそういう経歴は何も書いてなくて、経歴などというものを一切取捨てた一人の女であり、また一家の主婦であって、その女が自分自身を相手に続けた人生に関する対話である。」

この本には、わたしの大好きな言葉がたくさんある。

「そして私はものを考える時は鉛筆を手に持っていたほうがいいので、いつの間にか書き出した。」(序)

「夕方、私たちの家の暖かくて親密な空気の中にもどってきた。私たちは火が燃えている炉の前でゆっくりシェリー酒を飲み、話をしながら夕食を始めた。私は学校時代の習慣がまだ残っていて、朝は頭を使う仕事のためであり、午後は手仕事、それから外でやる仕事に適しているという気がする。しかし夜は人と考えや感想を分け合い、話をする時である。」
(たこぶね)

ほかにもたくさんあるが、これにとどめる。訳者の吉田健一氏が、「名著」と書いているが、まったく同感である。

3 時(とき)について

とき、時間とは不思議なものだ。他の次元(縦、横、奥行きまたは深さ)の動きはすべて双方向、可逆的であるのに、時間だけはそうでない。「時計の針をもどすことはできない」のである。

わたしは、ある時期から「とき」の選択(タイミング)ほど重要なものはないと思うようになった。もっとも、それは昔からいわれていたことである。天地人(天の時、地の利、人の和)という言葉がある。戦いをするときの三大

要件を指すが、その第一が「とき」である。このことは戦いにかぎらず、何ごとをするにも重要なことに思える。他の要件を完璧にととのえてもタイミングを誤ればすべては水泡に帰する。

少し古いが、日清戦争のとき、三井物産、上海支店の森恪（つとむ）は、ロシアのバルチック艦隊が東シナ海を北上しているのをいち早く察知して、上海の舢（はしけ）をぜんぶ押さえてしまった。軍艦が接岸することはできないので、食料、燃料などの補給に舢は欠かせない。翌日、たった一晚の遅れで上海のロシア領事が舢を用船しようとしたら一艘もなかった。日本海海戦で日本帝国海軍が勝利した重要な原因の一つとされている。

ま、そんな大げさな話でなくともいい。私自身の経験でも、人生の重要なふし目で、「あのとき」、正に「あのときに」決断していなければ、まったく人生が変わっていただろうな、ということがいくつかある。結婚、退社、大学の教員就任、学長選挙当選。

諸君にアドバイスしよう。

ときの選択を誤ったらダメである。「チャンスにうしろ髪はない」というとおり、絶好のタイミングを逡巡して逃してはだめだ。「証文の出しおくれ」という言葉があるように、「手おくれ」が成功することはまずない。むしろ、まだ早いかと思っても先手を打つとそれが最高のタイミングであることが多い。「先手を打って失敗しても後悔しない」という覚悟が成功をもたらす。

4 弘法筆を選ばずと道具

「弘法筆を選ばず」は、辞書に「真の名人はどんな道具をつかってもすぐれた仕事をするのたとえ」（集英社『国語辞典』1993）とあるが、これはまちがいではないかと思う。真の名人とは、よい道具を見分け、また、その道具のもつ性能を最大限に引き出す力量をもつ人だ、と思う。

身近なところ、腕の立つ料理人、板前さんが切れない包丁を使っているとは信じられない。また、たぶんに伝説的だが、左甚五郎がつかったカンナ、

近藤勇が愛用した長曾根虎徹などは最高の道具であったにちがいない。樽源の湯豆腐の道具というのもそうらしい。

弘法筆を選ばず、という言葉のわたしの解釈は、次のとおりである。

弘法大師がある貧しい寒村を訪れた。村の人々は、有名な弘法大師さまがおいでになったとって大喜びをして、何か一筆書いていただこうということになった。しかし、とてもつかっていただけるような、いい筆はない。そこで、おそろおそろ「何か一筆お願いしたいのですが、こんな筆しかありません」と頭を下げた。

すると、大師は、「いいですよ」とニッコリ笑って、その筆でさらさらと書いてあげた。

つまり、「こんな筆では書けない」というごうまん人ではない、思いやりのある謙虚な人であったから尊敬されたのである、という意味である。

5 「つき」の重要性

「つき」つまり、ラッキーである、ということはきわめて重要である。運も実力のうち、というのが本当だと思う。

では、運がいい人、ついている人、とはどんな人だろうか？

まず、ついている人は、だいたい心がけがいい人である。心がけがいい、とは、人に親切で、謙虚である、というような意味である。人を疑ったり、嫉妬するようなくせのある人はついている。

それから、積極的に前に出る気持ちが必要だ。チャンスがあるのにためらっているようでは運命の女神に見はなされる。マキャヴェッリが「運命の女神は征服したい、という欲望をあらわにしてくる者のほうになびく」といっているのは真理だと思う。

しかし、あまり頑固であってはならない。自己主張にこだわりすぎるとこれも女神にきらわれるのである。フレキシブルにする、柔軟な態度をいつも心がける。押してだめなら引いてみな、というのはこのことである。とくに、

だれでも、ついていないと感じることはある。そういうときは、一步退いて、少し待ってみるのがいい*。

*「押しても引いてもダメなら、待ってみな」というのがわたしの考え出したオリジナルな諺である。

ナポレオンが師団長を選ぶときに、「能力はどうでもいい、運のいいやつがほしい」といったそうだし、日清戦争のとき、東郷平八郎が海軍司令長官に任命されたときも、「あいつは運がいいから」というのが理由だったそう

だ。運のよしあしは、戦争にかぎらない。人生のあらゆる面で決定的な要素になる。考えてみれば、人生もある意味で戦争である。

ついていない人は、つきを呼びこむ工夫が必要だ。そうでないと不幸せにおわる。

6 法は美しい乙女

もう40年も前、大学生のとき、わたしは第二外国語にフランス語を選択した。その後、勉強をしなかったからほとんど忘れているが、いまでも鮮明に覚えている言葉がある。それは、

“La loi est une jolie fille; elle est faite pour être violée.”

というのである。

日本語では、この言葉のニュアンスが伝わりにくいからこのままにする。これを教えてくれた先生は学生に強烈な印象を与えたわけである。すばらしい先生がいたものだ、といまでも思う。

そして、この格言は、法というもののある一面をたしかにとらえていると思う。フランスのエスプリというものだろうか。いや、ビル・エモット氏（イギリスの代表的週刊誌、*The Economist*の編集長）が書いた「本来のリベラリズムは、権威を公然と疑う自由によってこそ人々は幸せになりうる、という

信念である」(『官僚の大罪』, 草思社, 1996)ということに一脈あい通じるものがあると思う。成熟した, あるいはしっかり根を下ろした民主主義を支える根幹といえるのではないだろうか。

「権威を疑う」のはわたしの生きかた, 考えかたの根本にあることなので, まったく同感するいい言葉であると思う。

7 「ハンパ」はいけないか

「ハンパじゃない」という言葉をよく聞く。何ごととも徹底的にやる, 中途半端ではだめだ, というのが日本人にしみついた考えのようだ。しかし, ものごとには, やりすぎてはいけないこともある。

たとえば, 古今東西を通じてもっとも権威ある戦略書, 孫子の兵法では「勝ちすぎはいけない」と教えている。相手を窮地に追い込んではいけない, というのは, 「戦い」というものを多少は知っている人の常識だろう。

日本人は「適度におさえる」, 「ほどほどにする」ことが苦手のようにだ。太平洋戦争も, 「勝利が一億玉砕しかない」と当時の指導者はいって平然としていた。戦争には必ず終わりがある, 終わったあとどうするかを考えずに戦争すべきではない, ましてや勝ち目のない戦争をやってはならない(これも孫子がいっていることである)。なぜ, こんなあたり前のことを国民, とくに子どもに教えなかったのか。それほど常識のない, 目の見えない連中だったわけである。

留園という豪華な中華料理店が芝増上寺の向かいにあった。そのオーナー, 日本在住華僑のドン, 盛(セイ)さんは『漢民族から大和民族へ』という本のなかで「日本人は, 酒は明日も飲めるということを知らない」(なぜ, 今日酔いつぶれるまで飲まなければならないのか?)と書いた。名言だと思う。この簡潔でユーモアあふれる言葉で, 日本人の弱点を見事についている。

「ほどほどにしておく」ことは, 国際社会で上手に生きていくために大切なことではないだろうか。日本人は「ハンパはいけない」と思いこむから失

敗する。それを逆手にとって日本をたたけ、と思う他国があるのである。

勝てるはずのない太平洋戦争に引っ張り出されて負けてしまったのも、それが原因である。

8 改札口の待ち合わせ

学生諸君がよく駅の改札口でタムロしているのを見かける。コンパ、飲み会などという集まりのためだろう。本題とは関係ないが、こういう集まりはカッコよく、「パーティ」と呼んでくれと私はいつている。

改札口の待ち合わせを見るたびに「もっと工夫をなさいよ」といいなくなる。なぜか？

日本人はだいたい時間にルーズである。人を待たせることをあまり悪いと思っていない。「午後6時に」という約束をすると、「6時ごろ」と思うのがふつうだ。5分、10分遅れても申しわけないという気持ちはない。謝りもしないで、「お待たせ」などといってすましている人が多い。

待ち合わせをすれば、一人や二人は遅れてくる。時間を守った人は損をする。わたしのもっとも尊敬する亡くなった本田宗一郎さんは、「何が大切か」といって時間ほど大切なものはない。どんなに恵まれない人でも1日24時間保証されている。金なんかなくしても取り返すチャンスはある。失った時間は絶対にもどってこない」といった。そのとおりである。遅れてくる人が時間を守る人の権利を侵害して平気な人は何かが欠けている。罰金を払うべきである。

だから、改札口で待ち合わせるのをやめることだ。駅前の喫茶店にすればいい。私なら、ホテルのバーだ。時間どおりきた人はコーヒーでもビールでも注文する。遅れた人が代金を払う。これがフェアなつきあいというものだ。

9 ミ・リヴェドライ，ティ・リヴェドロ

「きみは私に再び会える，私はきみに再び会える」

わたしが学長に就任した年，1993年に本学入学案内書に書いた言葉である。大好きな作曲家ロッシーニ、『タンクレーディ』(*Tancredi*, 1813) というオペラ・アリアの一節である。

この言葉は，大学，いや大学にかぎらず，小中学，高校でも，先生といわれる職業についている人に共通にいえることではないだろうか。

学校で出会って，それで終わりではない。何年かあとになって卒業生に，あの先生にもういちど会いたい，と思ってほしい。先生もあの生徒，学生に会いたい，そして再会できる。おたがいに「これだけやりましたよ，しっかりやっていますよ」といえるようになりたい。それがこのモットーなのである。

10 ジャングルと動物園

日本とアメリカの社会を比較して，わたしは日本は動物園でアメリカはジャングルだという。

日本は，動物園だから安全だし，餌も毎日くれる。しかし自由はない。それに対してアメリカはジャングルだ。危険だから自分の身は自分で守らなければならないし餌だって自分で探さなければならない。しかし，自由があると*。

*シアトル郊外，ベルビューCCのジャワハル勢子先生が，来日したとき，「あ，それいいですね，私にもつかわせてください」といつてくださった。

この話をもう少し展開することができる。

その一つ。「自由がなくても，檻（おり）のなかでも安全がいい。動物園

をしっかりと守ろう」という主張をする人がいる。案外、そういう日本人が多いと思う。しかし、動物園だって、キリンや鹿、羊、パンダのようなおとなしい動物だけでは魅力がないだろう。ライオン、タイガー、豹のような猛獣がいなければおもしろくない。

こういう猛獣を、人工繁殖させ維持できるだろうか。たぶんだめだ。遺伝子的に種(しゅ)が劣化していくから、動物園では2世代くらいで終わりだろう。つまり、ジャングル(アフリカの原野)からつれてくるしかないのだ。

このことを比喩的に考えると、日本が安全でたのしい動物園でありつづけるためには、ジャングルとの関係を大切にしなければならない、ということにつながってくるのである。

もう一つ。これまで安全であった日本も、バブル以降はあやしいものである。動物園のおりが老朽化して、こわれかけている。猛獣がいつとび込んでくるか不安になってきた。もらえる餌も食べて安心、大丈夫か？ そんな疑問を感じるさまざまな事件が起きるようになってきた、といえないだろうか。

11 自慢したいことについて

わが国では、じまんすることはいいとされない。「あいつまた、じまんしてやがる」と、きらわれることが多い。海外では、自己主張のない人は無視されてしまうから、じまんをするのはむしろ当然で、それを否定するような空気はない。日本では、むかしから謙譲の美德とか、能ある鷹はつめをかくす、などといういい方でじまんなんかするな、と教えこんで、教えこまれてきた。

しかし、自慢したいのは本能だろう。自分ではいいにくいけれど、相手が「あなたの書いた論文はすごいですね」などといってくれないかな、というような気もちになることがある。浪曲は流行らなくなったけれど、広沢虎造の『清水次郎長伝、三十石船道中』で語られる森の石松のセリフ、「ムネに

手を当てて、ヨーク考えてくれ、清水一家にはもっとケンカの強いのがいるだろう？ 断然、いちばん強いのが？」を思いだせばわかる。つまり、ときや場所をこえて、人がみな共通にもっている、自分がいちばんという自惚れである。

もつとも、相手にとって自慢を聞かされるのはあまりいい気分がしないこともたしかだ。そこで、相手にイヤな思いをさせないで、上手に自慢する方法はないか考えてみた。次の二つだと思う。

1. まず、自慢していいですか、と断って、相手の了解をとってからしゃべる
2. 次に相手にもじまんするチャンスをあげる。つまり、相互主義でやる。

これならいいのではないだろうか。知らんふりをして、じまん話を長々とする人がいるが、相手はシラけるばかりである。上に書いた、相互主義で、上手にじまんし、相手にもそうしてもらうのがつき合いをたのしくするコツだと思う。

12 覚悟がすべてだ

「一羽の雀が落ちるのも神の摂理。くるべきものは、今こなくともいずれはくる。今くれば、後にはこない。後にこなければ、今くるだけのこと。肝心なのは覚悟だ*。」(ハムレット、第5幕、第2場、福田恒存訳)

* "There is special providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis not to come — if it be not to come, it will be now — if it be not now, yet it will come — the readiness is all."

わたしの好きな言葉の一つが「覚悟がすべてだ」である。妹オフィーリアの死をうらんで決闘を申し込んだレアティーズの挑戦を受けてハムレットが立つ。親友ホレーショが心配して、「何か、ご心配でしたら辞退なさった方がよろしいのでは？」と進言するのにたいしてという言葉である。

この、「覚悟がすべてだ (“The readiness is all.”)」は、われわれの生活のなかで、ときどき思い浮かべたい言葉のように思う。平穩無事、ハッピーな生活をしていても、決断しなければならないときは案外多いのではないだろうか。

13 ダシール・ハメットのこと

ダシール・ハメット (Dashiell Hammett, 1894–1961)* はハードボイルド・ミステリー小説の創始者であり、現代作家に大きい影響を与えたとされている。代表作は『マルタの鷹』、『やせた男』、『赤の収穫』である。

*メリーランド州、セント・メリー群に生まれ、フィラデルフィア、ボルチモアで育った。学校は14歳で中退し、メッセンジャー・ボーイ、新聞の売り子、事務員、鉄道の操車係、沖仲士、機械運転者などありとあらゆる低賃金の仕事を経験してからピンカートン社の探偵になった。第一次世界大戦後、結核になり入院したが、退院後再び探偵の仕事にもどってから作家に転向し、ただちにベストセラー作家になった。

ハメットは、登場人物の姿をじつに克明に描写する。探偵という職業を経験して、瞬間的に相手の姿をとらえるのが習慣になっていたのだろう。その一つを紹介しよう。

「彼女はわたしより1インチか2インチ背が高かったから、5フィート8インチくらいだ。彼女の肩幅は広く、胸は豊満でヒップはまりのようなボディ、脚は筋肉の塊のようだった。彼女が差し出した手は柔らかく、暖かく、しっかりとしていた。顔は25歳くらいの若さだが、少しくたびれ始めている。大きく熟した唇の端に細い線が走っている。もっともささいな線だが、濃いまつげの目の周りにネットをつくっている。それは大きな目で、青く、少しばかり血走っている。(あと省略)これがあの有名なダイナ・ブランドだ。ポイズンビルの男たちのなかから、好きなのを好きなように選ぶ、あの女なのだ。」(Red Harvest, 1929)

事実上の妻であった劇作家リリアン・ヘルマン (Lillian Hellman, 1905-1984) が、ハメットの短編集 (*The Big Knockover and Other Stories*, 1966) にとてもいい序文を書いている。そのなかから二文だけここに紹介する。

「あの人の刑務所での務め*はトイレの掃除でしたが、彼はわたしが家でやっていたよりはるかにキレイに掃除をしていたんですよ。」

「ハメットは、わたしが会った人の中で、まったくお金にこだわらない人でした。お金がなくなってもぜんぜん不平を言ったことはないし、後悔もしなかったんです。」

*ハメットは、ある公民権団体とのかかわりで1951年に刑務所入りをさせられたのである。

何十年も惚れて一緒に暮らした間柄だったから誇張もあるかもしれない。しかし、うらやましいものだ。こういう生き方をしたいものである。ハメットは、67歳で死んだ。この文を書いているわたしの年である。

14 大海を回遊するイワシになる

学生諸君を指導してきて思うのは、どうしてこうも皆おとなしいのか、ということである。まるで、深海魚じゃないか。海の底にじっと座っていて、目の前にエサがきたらパクッと食べるだけ、そういう感じである。

こういいたい。「そんなんじゃなくて、親潮にのって太平洋をのびのびと回遊するイワシになろう」とね。千島列島から下ってくる寒流 (親潮) と南からくる暖流 (黒潮) がぶつかる三陸 (岩手、宮城あたり) の沖で世界最高のイワシがとれる。

あの小さな体で太平洋を泳ぎまわるんだ。サメに食われもせずね*。そして三陸の漁師のところに集まってきて、われわれの食卓をにぎやかにしてくれる。

そういう、スケールの大きな気持ち、サーピス精神をもとうじゃないか。

* 『サメと一緒に泳いで食われない方法 (How to Swim with Sharks without Being Eaten)』という本がありますよ。

15 ネーミングの重要性

名前というものはじつに重要だ、とつくづく思うようになった。シェークスピアに有名な次の言葉がある。

「名前に何があるのか？ バラと呼ぶもんだって、別の名前でも甘く香しいのは変わらないではないか。『ロメオとジュリエット』第2幕、第3場、*“What’s in a name? That which we call a rose, by any other name would smell as sweet.”*」

しかし、これはまちがいでであるとマーケティングの専門家がいつている。「バラはバラという名前でなければならない」と。商品にいい名前をつけるかどうかで売れ行きは段違いなのである。

そのとおり、たとえば、『フォーカス』という写真週刊誌がある。これ以上のいいネーミングはない。その後『フライデー』、『フラッシュ』などというミー・ツーものが出ているが、あいまいなネーミングである。TIME, Newsweek, Fortune, BusinessWeekなどの雑誌名についてもいえることである。

人の名前。マーゴ・フォンテーンという、プリマ・バレリーナがいた。彼女の本名はマーガレット・フッカムである。若くして亡くなった女優マリリン・モンロー (“How I miss her!”) の本名はノーマ・ジーン・モーテンソーである。わたしの好きな歌手にジュリー・ロンドン*がいるが、この名前も本名ではなからう。

*ハスキー・ボイスを流行させた人、『この世のはて』 (“The End of the World”) がすばらしい。

企業名も同じことである。米国の航空会社では、アメリカン、ユナイテッドがトップである。イースタンというような、ローカルな名前ではだめだ。いい名前を選ぶ。大事なことだ。

16 チャンドラーの名文句

「強くなければ生きて行けない、やさしくなければ生きる資格がない」
（“If I wasn't hard, I wouldn't be alive; if I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.”）

レイモンド・チャンドラー（Raymond Chandler, 1888-1959）は、別稿ダシール・ハメットとならぶハード・ボイルド探偵小説の流れをつくった元祖であり、後年の小説家に多大な影響を与えたとされる。ある編集者は、「文学界の寵児スコット・フィッツジェラルドよりもその影響は大きい*」と書いているほどである。

* Tony Hillerman and Rosemary Herbert, *The Oxford Book of American Detective Stories*, 1996, p.5.

好きな言葉は？、と聞かれて、冒頭の言葉をあげるビジネスマンが多い。しかし、この出典を知っている人はたぶん少ない。この言葉はチャンドラーの『プレイバック』（*Playback*, 1958）という作品で、私立探偵、フィリップ・マーロウが女性依頼人にいうセリフである。

酒でも飲みながら、たのしむ会話のトピックとして好適だと思う。

あとがき

本稿は、1999年秋から執筆準備をはじめた。資料はこれまで22年間、演

習，プロゼミナールのために作成してきたもののなかから選んだが，読み返し，できるかぎり手直しをし，参考になると思うことを書き加えた。

正直にいえば，掲載をお願いしたい他の原稿もたくさんある。また，もっとくわしく書きたいこともある。しかし，すでに枚数が多く，これ以上紙面が増えては編集者の方々にご迷惑をかけることになると考え，これにとどめた。

執筆の機会をいただいたことに深く感謝しつつ，筆を措きたい。